

# 異年齢保育における子どもの育ちに関する一考察

—異年齢保育が育むもの—

泊 明希佳

A Study on Children's Growth in Multi-age Childcare :  
What Multi-age Childcare Nurtures

Akika Tomari

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別冊

令和 2 年 3 月 31 日 発行

# 異年齢保育における子どもの育ちに関する一考察

## —異年齢保育が育むもの—

A Study on Children's Growth in Multi-age Childcare : What  
Multi-age Childcare Nurtures

泊 明希佳

Akika Tomari

### はじめに

日本において、核家族化や少子化、地域の人間関係の希薄化による子育て機能の低下などが指摘されるようになって久しい。子どもを取り巻く環境は大きく変化しており、遊びの質にも変化がみられるようになった。その代表的なものがテレビゲームの普及である。このような背景から、以前は多く見られていた子ども達の異年齢集団が殆ど見られなくなってしまった。異年齢集団の中で育まれてきたものを、保育施設や幼稚園において補償しようと異年齢保育を導入する園が近年増えてきている。本研究は、異年齢保育における子どもの育ちに着目し、異年齢保育で経験するものが子どもの育ちにどのように関係しているのかを、文献研究とエピソードを基に明らかにすることを研究の目的とする。

【キーワード】 子ども、異年齢保育、異年齢集団

### 問題と目的

近年、日本では少子化問題が深刻な問題となっている。「平成 30 年度版少子化社会対策白書(内閣府)」(図 1)によると、1975(昭和 50)年に 200 万人を割り込み、それ以降は減少し続けている。1994 年に一旦増加はしたものの、それ以降は緩やかな減少傾向となっている。

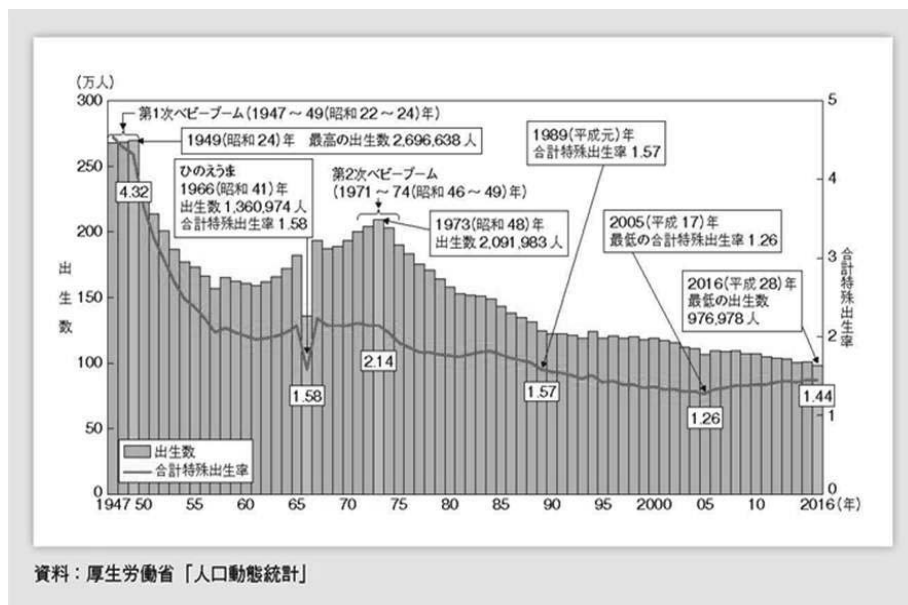


図1 合計特殊出生率及び出生次数の推移

出典：内閣府 「平成30年版少子化社会対策白書」 p6

少子化問題に対しては、待機児童問題の解消に加え、最近では幼保無償化などの対策が講じられているが、合計特殊出生率はいずれも増加傾向にあるとは言い難い状況にある。

少子化や核家族化が進むことで、家庭内におけるきょうだい数は減少傾向にある。以前なら家庭内において当たり前のように見られていた年長者が年少者の世話をし、年少者が年長者に世話をされる姿も見られなくなってしまった。きょうだい数の減少の一方で増加傾向にあるのが1人っ子である。前述した年長者が年少者の世話をし、年少者が年長者に世話をされる関係性の中で生まれているものが、年少者への思いやりや、年長者への憧れであるとするなら、きょうだい数の減少傾向にある日本では、それらが育まれない、或いは育まれにくい状況にあるといえる。尚、本論文では「兄弟」「姉妹」「兄妹」「姉弟」の関係にあるものを全て、きょうだいという言葉で統一するものとする。

近所の遊び仲間の減少も、少子化や核家族化が要因となっている。近所の遊び仲間は、同年齢だけでなく、様々な年齢の子どもで構成されることもあった。近所の遊び仲間の大きな特徴として、「遊び」を目的とした集団であるということも挙げられる。楽しく遊ぶためにはルールや役割分担が必要である。年長者はこれまでの経験からそのことを自覚し、年少者は年長者の姿を見てそれを学んできた。年齢、経験、体力の差に応じて役割が生まれ、それぞれがその役割を果たすことで、遊びをより充実したものにしてきた。さらに、「お世話される」体験を通して「お世話する」体験を積むという役割の推移が継続的に行われる。役割の推移は、一部の子どもだけに限らないということも

大きな特徴である。このような近所の遊び仲間の「お世話する」「お世話される」関係の中で、子ども達は、①約束を守ること、②年少者を思いやること、③我慢すること、④年長者への憧れを抱くことを経験している。

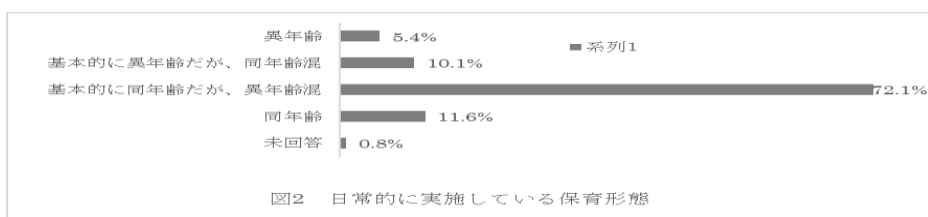
しかし、少子化や核家族化が進む日本において、近所の遊び仲間をはじめとする異年齢集団をつくるのが困難になっている。こうした背景から、近年、保育施設や幼稚園において、擬似的なきょうだい=異年齢のかかわりを重視しようと異年齢保育を導入する園が見られるようになってきた。異年齢保育実施園で進行していることは擬似きょうだい体験として重要である<sup>註1)</sup>。

本研究では、異年齢保育における子どもの育ちや異年齢保育に期待されるものや課題等を、実際の保育現場のエピソードを基に先行研究と照合し、検証していくことを目的とする。

尚、著者自身が保育士として勤務した9年間の保育実践において見られた子ども同士の関わりをエピソードとして用いた。エピソードに登場するY保育園に対して、エピソードの使用の了承は得ており、エピソードに登場する園児に関しても、個人が特定されないよう配慮を行った。

## 異年齢保育とは

3歳・4歳・5歳といった異なる年齢の子ども達でクラス編成をし、保育する保育形態を表している。近年では、3歳未満児の増加に伴い、安全に留意しながら、1・2歳児と3歳以上児の異年齢交流が検討されるようになってきている<sup>註2)</sup>。縦割り保育・混合保育と呼ばれることもあるが、本論文では、異年齢保育で統一するものとする。同年齢の子ども同士の活動を確保することを考慮し、異年齢保育と同年齢保育を組み合わせる保育を実施する園も多い(図2)。



出典：泊「異年齢保育と同年齢保育の比較に関する一考察 — 「心の理論」の形成を中心として—」(2019) p7

図2は、日本保育協会による「保育所の保育内容の実態に関する調査研究(1997年)」を基に著者が作成したものである。図2によると、「基本的に同年齢だが、異年齢で保育することもある」が72.1%と最も多かった。保育施設や幼稚園が異年齢保育を積極的に導入しようとしながらも、依然として同年齢保育を実施している場合が多いことを、この調査研究は示唆している。これは、異年齢保育を導入しようとする際、保護者からの反対意見として挙げられる「年齢ごとの発達保障の問題」が関係していると考えられる。「年長児の発達保障の問題<sup>註3)</sup>」として、異年齢保育導入時に常

に反対意見として挙げられる問題である。家庭では体験できない同年齢の子ども同士で助け合い、協力し、競い合うという経験を通して、その年齢に応じた基本的生活習慣などを学ぶことが、同年齢保育には求められている。

一方、異年齢保育を実施する目的としては、少子化や過疎化により同年齢のクラス編成が困難になったことにより、やむを得ず導入するものと、多様な仲間関係の形成や社会性の発達に良い影響を期待し導入するものの2点が挙げられる。これまで異年齢保育は、やむを得ず導入されるものが一般的だったが、異年齢保育の必要性を訴えて、あえて異年齢保育を導入する保育施設や幼稚園も少なくない<sup>註4)</sup>。また、やむを得ず導入される異年齢保育を「条件的異年齢保育」とし、あえて導入される異年齢保育を「理想的異年齢保育」と位置づけられている<sup>註5)</sup>。

### 異年齢保育のねらい

子ども達が年齢の枠を越えてかかわり合う事で、社会性や協調性、思いやりの気持ちなどが育まれることが期待されている。異年齢保育において他者とかわる場合、そもそも年齢が異なることから、互いの違いを認め合うこともできる。年長児が年少児に対して思いやりをもって優しく接するとき、年少児は年長児に対し憧れを抱く。さらに、年少児にとって年長児に優しくされた経験は、自分が年長児になった際の年少児への優しさへとつながる。先に述べた近所の遊び仲間の役割の推移とは、このように行われている。また、年少者は年長児に対して憧れや目標をもつ。1年後、或いは2年後の自分が成長した姿を具体的にイメージすることを可能としている。

上記に見られる子どもの育ちは年長児から年少児へ、年少児から年長児への一方向性がある。従来の研究では、異年齢保育において育つものは、年長児にとっては年少児への思いやりであり、年少児にとっては年長児への憧れであるとされてきた。しかし、思いやりが育つのは年長児だけでなく、年少児の思いやりが育つ基礎も育んでいる<sup>註6)</sup>。さらに、年長児は年少児に頼りにされ、お手本となることで、自己肯定感を育むことができる<sup>註7)</sup>。このように、異年齢保育における子どもの育ちには、年長児と年少児の間に双方向性があることが窺える<sup>註8)</sup>。

### 異年齢保育の特徴

異年齢保育は、遊びのコーナーを設ける「コーナー保育」と連動し、行われることが多い。前述したように、異年齢保育における子どもの育ちには双方向性がある。言い換えると、相互に育ち合い、学び合うことが異年齢保育の目的でもある。従来の保育者主体の「教えて育てる保育」から子ども主体の「生活を通して育てる保育」へと変換を図っている。そのため、保育者は全体を見渡し、子どもの興味や意欲を引き出すような言葉をかけ、どの年齢の子どもにも対応できる環境構成をする必要がある。

「札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書<sup>註9)</sup>」において、「理想的異年齢保育」

実施の理由として、以下の6つの内容を示している。

- 1) 子どもの成長、発達に良い効果を期待しているため
- 2) 以前のように地域で異年齢の関わりをもつことが難しくなり、大人が意図的に機会を作る必要性を感じたため
- 3) 子ども同士を比較しない、或いは、できる・できないといった見方をしないようにするため
- 4) 障がいのある子どもを受け入れている。異年齢保育を実施することで色々な子どもがいるという多様性を、子ども達も保育者も認め合えると期待しているため
- 5) 年齢にとらわれずに友達を選択することができるため
- 6) 家庭的な雰囲気を経験することができるため(きょうだい体験)

特に 3)に関する内容は、年齢による発達の指標にとらわれることなく、一人ひとりの発達を個人差としてとらえることの必要性を述べている。異年齢保育導入にあたり、発達保障の問題が挙げられることが多いと前述したが、同年齢保育の良い点は、子ども達が一定の発達段階にあることから、ねらいや目標を立てやすいところにある<sup>註10</sup>。しかし、発達段階にとらわれ過ぎてしまうことで、子どもの習熟度具合で育ちを捉えてしまうことが危惧される。「できる・できないといった見方をする」ことは、子ども同士を比較することにもつながる。

異年齢保育では、年齢・経験・体力の異なる子ども達が一緒に同じ活動に取り組む。年長児が年少児に活動内容を教える際には、年少児に分かりやすい言葉で伝える語彙力が当然必要になる。年少児に合わせて、活動内容によってはルールを変えたり、手順を変えたりするなどの創意工夫も必要になる。年中児にとっては、そのような年長児の姿を間近に見ることで、自分の目標をする年長児の姿をイメージしやすくなる。年少児にとっては、年長児に優しくされた経験が、思いやりを育む基礎になる。このように、異年齢保育における役割の推移は継続的に行われている。

## 異年齢保育の課題

前述したように異年齢保育には「年齢ごとの発達保障の問題」がある。他にも、年長児に対して「お世話する」役割を期待するあまり、負担を強いてしまうこともある。過疎化により、異年齢保育を導入している「条件的異年齢保育実施園」では、近隣の園との交流を図り、同年齢での活動時間を意図的に設けるといった事例も報告されている<sup>註11</sup>。

異年齢保育に対する保育者自身の理解も必要である。保育者自身が子ども達の多様性を認め、年齢にとらわれず一人ひとりの子どもの育ちを受け止めていく柔軟性が必要である。

## 実践事例と考察

エピソードに登場する Y 保育園は、2017 年度当時、異年齢保育を導入して 2 年目である。表 1 に Y 保育園のクラス編成を示す。

表 1 2017 年 Y 保育園の A 組・B 組のクラス編成

	A組	B組	合計
年少々児	2人	1人	3人
年少児	5人	6人	11人
年中児	8人(月齢の高い年少児2人を含む)	9人(月齢の高い年少児2人を含む)	17人
年長児	5人	4人	9人
合計	20人	20人	40人

尚、年少々児は 2 歳児、年少児は 3 歳児、年中児は 4 歳児、年長児は 5 歳児を示している。

表 1 によると、年齢ごとの人数の偏りが見られるものの、A 組・B 組の両方とも 20 人ずつで構成されている。朝の会、給食、午睡、おやつ、帰りの会は異年齢保育を実施し、設定保育の時間のみを同年齢保育を実施していた。

次に、エピソードをいくつかのテーマに分けて紹介し、考察を加える。

### 1) 同年齢の友達と上手くかかわれないが、年少児とのかかわりを通して自信を育んでいる年長児 A 子

「年長児のみの活動(文字の読み書きなど)では、時間がかかることが多い年長児 A 子だが、年少々児 B 子のお世話をすることを楽しんでいる。午睡時は、年少々児 B 子が年長児 A 子に寝かしつけてもらいたがることも多い。他の年長児が寝かせようと頭を撫でて年長児 A 子を指差す。その姿を見て、年長児 A 子も『分かってる、待ってて。』と答える。年長児 A 子が年少々児 B 子の側に行き、優しく頭を撫でると、年少々児 B 子も安心して目を閉じる。」

このエピソードからは、同年齢での活動時に、他の年長児と比べて時間がかかってしまっている年長児 A 子が、年少々児 B 子に頼られることで、自信を育んでいることが伺える。

### 2) 年少の子どもに寄り添う年長児 C 子

「年少児 D は、4 月当初、新しい保育室や環境に慣れずに、登園時、母親と離れたがらず泣き続けることが多かった。保育園の門を見て泣き続ける年少児 D の姿に気づき、年長児 C 子が『どうしたの? ママがいいの?』と尋ねる。泣きながらも頷く年少児 D を見て、年長児 C 子は保育者に『先生、(年少児)D 君、ママがいいんだって。』と伝える。」

このエピソードからは、年長児 C 子が年少児 D に分かりやすい言葉を用いて尋ねている姿が窺える。また、年長児 C 子自身にも、母親と離れることを寂しがり、泣いていた経験があったことや、その経験から年少児 D の不安な気持ちなどを想像することができたことも窺えるエピソードである。

### 3) 今日遊びたくない

「年長児 E 子は、どの年齢の子どもからも慕われている。特に、年少々児 F は、年長児 E 子の側を離れたがらない姿が自由遊びのときも見られる。夕方の戸外遊びでは、いつものように年長児 E 子の後を追いかける年少々児 F だったが、年長児 E 子が走って遠くへ行ってしまうため、ついに泣き出してしまった。保育者が気づき、年長児 E 子に話を聞くと、『今日は(年長児)G 子ちゃんと遊びたい』と答えた。」

このエピソードからは、普段は可愛がっている年少々児 F だが、この時ばかりは年長児同士で遊びたがっている年長児 E 子の姿が窺える。保育者にとっては、年長児 E 子の言葉を聞き、普段の年少々児 F へのお世話が負担になっていたかもしれないと考えさせられたエピソードである。

### 4) 役割の推移

「年中児 G 子は、年長児 E 子をととても慕っており、席替えで同じグループになった際も喜んでいった。年長児 E 子が体調不良で休んだ時、年少々児 F のお世話を進んで行っていた。次の日、元気よく登園してきた年長児 E 子に、保育者はそのことを伝えると、年中児 G 子は保育者の隣で得意気な表情を見せていた。」

このエピソードからは、年長児 E 子の姿を見て年少々児 F のお世話の仕方を観察していた年中児 G 子の姿が窺える。「お世話する」「お世話される」関係は、保育者が教えなくても、子ども達が日々の生活の中で育んでいることを感じられるエピソードである。

1) から 4) のエピソードにおいて、異年齢保育における育ち合いの双方向性があることや、同年齢の活動時間確保の大切さ、役割の推移が確認された。

## まとめ

近年、子どもを取り巻く環境の変化から、遊びの質が変化し、近所の遊び仲間で作る異年齢集団も殆ど見られなくなってしまった。異年齢集団の中で育まれてきたものを、保育施設や幼稚園において補償しようと異年齢保育を導入する園が近年増えてきている。異年齢保育導入に際しては、反対意見として「年齢ごとの発達保障の問題」が挙げられるものの、やはり、異年齢保育における子どもの育ちに関して期待されるものは多い。本研究では、異年齢保育における子どもの育ちには双



方向性や、役割の推移が確認された。

異年齢保育導入園の保育形態は自由保育である場合も多い<sup>註12)</sup>。従来の保育形態にとらわれず、子ども主体の保育を目指すことが、今後の異年齢保育の展望となろう。

### 引用文献

- 註1) 子安増生・服部敬子・郷式 徹. (2003). 縦割り保育の幼稚園における「心の理論」および関連する能力の縦断的研究, *京都大学大学院教育学研究科紀要*, **49**, 1-21
- 註2) 安部 孝・神戸洋子・堀 科・石本真紀・浅倉恵子・森田満理子・梅澤 実. (2013). 知りたいときにすぐわかる 新訂 幼稚園・保育所・児童福祉施設等実習ガイド, 同文書院
- 註3) 坪井敏純・山口 郁. (2005). 異年齢保育の中の子どもたち, *南九州地域科学研究所所報*, **21**, 1-10
- 註4) 坪井敏純. (2014). 保育所における異年齢保育と保育実習指導の実態, *鹿児島女子短期大学研究紀要*, **49**, 105-111
- 註5) 宮里六郎. (2013). 異年齢保育から保育を問い返す, *現代と保育*, **86**, 48-64
- 註6) 坪井敏純. (2018). 異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助のあり方:九州保育団体合同研究集会の異年齢保育の実践報告から, *鹿児島女子短期大学研究紀要*, **54**, 61-67
- 註7) 中村小津枝. (2013). 一斉保育から乳児担当保育、幼児異年齢保育への道筋:一人ひとりを大切に  
にする保育を目指して, *保育実践研究論文集(全国社会福祉協議会)*, 126-138, 139-146
- 註8) 坪井敏純. (2018). 異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助のあり方:九州保育団体  
合同研究集会の異年齢保育の実践報告から, *鹿児島女子短期大学研究紀要*, **54**, 61-67
- 註9) 吉田行男. (2009). 札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書
- 註10) 泊明希佳. (2019). 異年齢保育と同年齢保育の比較に関する一考察:「心の理論」の形成を中心として
- 註11) 坪井敏純・田平まゆみ. (2003). 交流保育における仲間関係の形成要因とその過程, *南九州地域科学研究所所報*, **19**, 25-32
- 註12) 坪井敏純. (2018). 異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助のあり方:九州保育団体  
合同研究集会の異年齢保育の実践報告から, *鹿児島女子短期大学研究紀要*, **54**, 61-67

### 参考文献

国立教育政策研究所編. (2001). 子どもの社会性が育つ『異年齢の交流活動』:活動実施の考え方から教師用活動案まで, 文部科学省

伊藤シゲ子. (2018). 保育内容『人間関係』に関する考察：乳児から5歳児まで一緒に暮らす中で育つ力 人として生きる力を考える, *日本福祉大学子ども発達学論集*, **10**

菅田 貴子. (2008). 異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究, *弘前大学教育学部紀要*,

